研究班紹介

5. 汽水の生活環境史

安室　知（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

本共同研究は、第１期共同研究「水辺の生活環境史」から引き続き、日本列島の沿岸域に広がる汽水域に注目し、そこに暮らす人々の生活文化を記録するとともに、「汽水文化」を提唱することを目的とする。また、その過程において、非文字資料研究としての生活環境史の手法を開拓する。

日本列島では、大河川の河口部や潟・内湾といった沿岸環境の多くは淡水と海水が入り交じる汽水域となる。そこは、従来、低湿なため人が暮らしにくい不毛の地、新田開発などにより克服されるべき悪地として位置づけられてきた。しかし、現実にはそうした地にも人が暮らし、また一見悪条件だからこそ、それを乗りこえ、また利用する民俗文化が形成されてきた。たとえば、淡水魚とともに海水魚が棲息する汽水域では独特な漁撈技術がみられるし、また水の制御がままならないからこそ、それに順応したかたちでの低湿地農耕が発達している。さらに、そこは海から河川への船荷の積み替えがおこなわれるなど、水上交通の要地ともなっている。こうした汽水域独特の文化要素を繋ぎ合わせ、日本列島の生活環境史研究として総合化し、新たな視点から「汽水文化」の解明を試みたい。

研究班紹介

6. 船上生活者の実態とその変容に関する研究

田上　繁（非文字資料研究センター研究員 / 研究班代表）

本研究は、近・現代における船上生活者の実態を追究し、その歴史的変容について考察する。江戸時代、肥前国や瀬戸内海には一年の大半を船の上で暮らす「家船（えぶね）」とよばれる船上生活者が存在した。長崎県の「大村郷村記」によれば、五島灘に面する瀬戸村では、家船 63 艘、人口 309 人がおり、かれらは三反帆ほどの船に乗り込んで鮑漁などの漁業に従事したとある。

こうした伝統や習俗は、変貌を遂げつつも近代に入っても受け継がれた。例えば、明治２年（1869）の「渋江公雄文書」（長崎県大村市）からは、明治 20 年代に瀬戸村の２家が「瀬戸家舟」であったことが確認される（写真）。

先の第二期の共同研究では、昭和 40 年代半ばごろ（1970 年前後）まで艀（はしけ）や機帆船で石炭を主とする貨物輸送に携わった北九州若松洞海湾の船上生活者の実態を解明した。第三期では、長崎県を含む横浜や瀬戸内海の船上生活者を対象に、港湾荷役や学校制度などと関連させながら、近代化の一端を担った船上生活者の性格を明らかにする。

家船の存在を示す明治期の記事